

ホトトギス

昭和二十四年二月二十八日出版
平成二十五年十月一日発行
第百十六巻第十号

ホトトギス

十月号



俳句随想 〔三百七十二〕

汀子

当て字、誤字が減らない。自分のことを考えたならば記憶している字を確かめないで使っているのが殆どである。最近は出来るだけ辞書で確かめて使うことにしている。

間違いやすい言葉として、こけら落としの柿（こけら）を柿（かき）と書く。又、壺の中に亜を入れるのは間違い。又、お洒落のしやを酒にしてしまうことは間違い。しやには一がありません。私自身が常に間違えるのは龍の右のつくりを二本にしてしまうことである。これは三本でなくてはならない。

木の芽を芽木と使うのは間違いと中村草田男さんが頻りに言われたのを記憶している。ここでも何度か書いたが、病後のことを予後と使うのは間違いである。予後は病後の経過のことで医学用語だそうである。花屑を水に浮かべて花筏と使われるが、花筏という植物があり、別な意味で使われることもあり、花屑という季題があるのだから、それを上手に使いたい。若葉光、新樹光、晩夏光など光をつけて使う人も居るが、光と付けなくても、若葉、新樹など明るい光が感じられる。

旬日記 汀子

平成二十四年十月一日 ロイヤル吟行会

台風風の置きて行きたる京の空
颯風の昨日は遠し京に逢ふ
忽ちに青空消して秋しぐれ
しぐれねばならぬ如くに京の秋

十月六日 菅屋ホトギス会

薄紅葉近づきすぎて見失ふ
草の実をつけ近道を来し証
露寒の朝の早発ち常となる

十月七日 下萌旬会

秋風の大地を覆ひはじめけり
地車の遠ざかる音引き乍ら
腰痛のため欠席露寒し
真夜の雨朝は上りて秋の風
稲雀一羽紛るる芝の上

十月八日 和田克司先生講演

しみにみと聞きぬ縁のさわやかに
今にして偲ぶ子規の世露けしや

十月九日 大阪倶楽部

椋鳥の瞬より立つ空広し
身に入みて仕事の山に向かひけり
地車の華やぎこぼし遠ざかる
わが小さき町にもありて秋祭
身に入むや消息届きそめしより

十月九日 綿素倶楽部

渡り鳥気づけばすでに遠き空
六甲の秋風渡る頃となる
鳥渡るために晴れたる空のあり
日常を取り戻したる秋の風

十月十一日 清交社

鴨の声とて来馴れをりしもの
早曉に済ましてハビリ秋の風
鴨に季節移ろふこと早し
石榴の実零れてまことそれらしく
移りゆく季節に追はれ秋の風
秋風と思ふ朝の間なりしかな
忘れもの取りに戻りぬ秋の風

十月十二日 工業倶楽部

快晴といふ秋の空今日のこと
遠目にも富士はめてみる秋の空
つけ合はせ菌でありし幕の内
とび立ちてやはり頬白なりしかな

十月十四日 西の虚子忌

横川路の露しみじみと踏む日かな
露寒といふ快晴の日の横川
木々はまだ紅葉急がぬ山路かな

十月十六日 有恒俳旬会

はかどらぬ仕事次々うそ寒し
道の辺の野菊そこより横川路
うそ寒し肩の力を抜く家居
この年の西の虚子忌も終りたる
消息を身に入みて聞きをりしこと

十月十六日 無名会

露寒や家居勿体なき晴に
心地よき芝生啄みをりしこと
小鳥来て快晴なれど露寒し
健康を何より露寒に処す
会場を間違へしとやうそ寒し
露寒し締切時間早めたる

十月十七日 夏潮旬会

色鳥の声にも色のありにけり
酸っぱいは苦手といひて蜜柑食ふ
朝の間に来たる色鳥午後は雨
染まるほど食べし若き日蜜柑むく
真夜覚めて星を見に出しそぞろ寒
行秋の早降り出して朝の雨
行秋の怪我も恙もあるがまま
十月十八日 クラブ合同
宇宙より見し一過客流れ星

十月十九日 時雨会

摘みためてなほ菊枕には足らず
さつそくに炊きて新米なりしこと
新雪の富士を視界に着陸す
稲雀より外れたる一羽みても
好き嫌ひあるその香り菊枕
どちらかといへば好まぬ菊枕

十月二十五日 きざらぎ会

よべの雨忘れし如く秋晴るる
秋晴を約す忌日でありしかな
啄木鳥の森とて通り抜けて去り
啄木鳥の音を残して莊を去る
今日よりは長き滞在秋の晴

十月二十六日 年尾忌

快晴といふ年尾忌の明るさよ
松手入終へ名苑に加はりぬ
皆心一つに秋の晴称へ
十月二十七日 旬会と講演の会
そぞろ寒日にち葉といふ言葉
一つづつ乗り越えそぞろ寒くとも
十月二十九日 摩耶山俳旬大会
よべ荒れしなごりの山路秋深し

廣太郎句帳

廣太郎

平成二十四年十月四日 「円虹」 円心集出句

初便元気な君が居ればこそ
若水を汲めば自づと道開け
歌留多取る元気な指でありにけり
双六のまだ上がること許されず
物語元気に続く去年今年

十月四日 角川「俳句」出句

海軍の栄枯盛衰ここに秋
梵鐘の一打に竹の春揺るる
山門を潜り新涼とのゆ会ひ
秋灯にモスコミュールの黄金色
長岡の秋の蝶とは風任せ
五十六の遺品に灯下親しめり
仲秋を掻き混ぜてゆく列車か
風潮を眺む恋人めく二人
風の盆光と闇を友として
虚子句碑に集まる爽やかな視線
鐘塚を涼しく虚子の訪ひしこと

十月四日 蕉心会

冷まじや人身事故を見てしまふ
十月はちよつとセーブをしなれば
下町の秋下町の羽音寄せ
萩零れ水面明るくなりけり
澄む水の中修羅場でありにけり
曼珠沙華あつちへ連れて行かれさう
目立ちたること供華に良き藤袴

十月六日 福知山市民俳句大会

秋の声新幹線の鉄路より
竹の春窓に迫り来る丹波

十月七日 野分会菅屋例会

鶴塚の鶴の叫びか秋の声

虚子館の展示物より秋の声
町内を歩ひ切つたる運動会
運動会徒競走だけ速かつた
十月八日 カトリック新聞選者吟
新涼や水惑星といふ恵み
十月十一日 七筆会

山門を潜り秋思を解きにけり
人生は脇役が良し鳴高音
サラリーマン秋思を解く昼休み
自角子土産に上州より佳人
十月十四日 西の虚子忌

句碑失せて露けき湖でありにけり
渡り鳥忌日の空を広げゆく
鐘一打西の虚子忌の空に消ゆ
十月十五日 朝日カルチャー若草句会

柿食うて子規は心に生き続けり
柿高し横川に忌心を置けば
柿の秋古都には古都の色があり
ぱつた跳ぶ高さを競ふこと
十月十六日 草木瓜会

空を見て体育の日と気付きたる
洗柿に口が歪んでゆきにけり
里山に忘れられたる柿たわり
この辺り古戦場とや柿の秋
柿熟れてこの家の歴史重ねゆく
十月十八日 登高会

ななかまど山が怒つてゐるやうな
情熱を色に置きたるななかまど
恙癒ゆ色と高きに登りたし
撫林一面燃やしななかまど
十月十八日 故 成瀬雄達俳句集に寄せて

爽やかや句集に偲ぶ為人
十月二十一日 むじ野吟行会

爽やかに通勤ラッシュ抜け小江戸
小鳥来る徳川の世を語るかに
秋声に紛れ込んだる時の鐘

秋の声とも天海の読経とも
朝露の大江戸発ちて小江戸へと
十月二十三日 「初時雨」二十周年記念号出句

紅葉且散る江戸の世を偲びつ
松手入されて江戸の世近付けて
庭園の石に庭園の鎮もれり
徳川の庭遠巻きに小鳥来る
十月二十三日 若水句会

鶯の下選手うなだれファン罵声
天高し玉入れ籠をはみ出して
天高し葉にべつたら市の粒を買ふ
天國の葉に続くこの坂天高し
鶯の先未来探してをりにけり
十月二十四日 目黒学園句会

耳は虫聴いてゐる目は君を見て
行秋を追ひかけ天に召されたる
ウイーンファイルめく虫の音でありにけり
十月二十六日 年尾忌

タイガーズドラフト成功年尾の忌
油点草忌日の色として淡し
年尾忌の為に咲くもの熟るもの
十月二十七日 ホトギス社句会

そぞろ寒昨日の酒の抜けぬまま
水濁すそとなく鳴の翔つ速さ
そぞろ寒その後の君は如何ならん
そぞろ寒払ふ佳人の講話かな
十月二十八日 野分会東京例会

二分休符秋声奏でをりにけり
日曜のオフイス街より秋の声
十月二十九日 「あらうみ」出句

秋思の歩通夜の灯の近づいてくる
十月十四日の不思議聞くも旅
天高し今日も四十分行の徒歩
柿の秋横川の忌心巡りに来る
未枯るる古都に忌心新たにす

雑詠

廣太郎 選

昔の名坂に残りて祭町 東京 今井千鶴子
 山車揉んで袖摺坂を曲りゆく 同
 さりげなく祭にまぎれ一女優 同
 少年と少女に返り磯五月 箕面 井上浩一郎
 青芝の一本づつの雨の粒 同
 蟻ひとつ小橋を共に渡りけり 同
 虚子に会ひ得たる今生明易し 長岡 安原 葉
 虚子偲び友も偲びて明易し 同
 虚子慕ひ学びきし道露涼し 同
 石をもて水もて鎧ひ城涼し 奈良 古賀しづれ
 聖堂の闇美しき新樹冷 同
 俳句とは信仰と言ふ人涼し 同
 一樹づつ茂りて山のふくらめる 袋井 湖東 紀子
 その刺に薔薇の本音のありにけり 同
 家の子も余所の子もゐて粽食ぶ 同
 富士桜咲いて此処らも裾野なる 熱海 嶋田 一歩
 富士桜咲く枝も花もつつましく 同
 富士桜人知らぬ間に散り終へし 同

下闇の底へと下りし出口かな 東京 田丸千種
 蛭席都会の足を浸しみる 同
 蛭席素足に水のぬめりたる 同
 同じ歌ばかりうたひて瓜きざむ 我孫子 副島いみ子
 歌詞忘れららららと瓜きざむ 同
 瓜きざむ指まで切つてしまひけり 同
 春愁の小指の傷に生まれけり 東京 河野美奇
 めまとひや追剥めきて眼を狙ふ 同
 夏霞動きて瀬戸の海近く 同
 あれにそれこれも片付け新茶汲む 神戸 山田佳乃
 芝居見の女華やぐ薄暑かな 同
 更衣かの日の釦とれしまま 同
 勝ち進み日焼に日焼重ねゆく 同 涌羅由美
 金魚には退屈の文字なかりけり 同
 空梅雨に象の背中也乾きけり 同
 夢いつもここで途切れて明易し 同 藤井啓子
 空梅雨の底の底なる小さき村 同
 山梔子の花の香溶かす銀の雨 同
 しんしんと万緑にこゑあるごとし 熊本 岩岡中正
 考への立ちどまりたる日傘かな 同
 夏潮にわが匂すつくと立ちあがれ 同
 ささやかな城ささやかな麦の秋 東京 大久保白村
 老鶯や鬼も市民として親し 同
 しぐれ白むつみは黒き日傘かな 同

雑詠句評（九月号より）

葉 眞理子・中正
美 奇・むつみ・とほ歩
憲 明・千鶴子・静 龍
保 佳・廣太郎

大胆なまでに省略されて、しかも却って景の拡がりがこれほどダイナミックに写生されている句を筆者は他に見た事がない。初夏の瑞々しい木々が緑も鮮やかな色に染められて行く。比叡山のような信仰の山も想像出来るが、自然の大きさに圧倒され、その中で溺れるような畏敬の念も感じる。（廣太郎）

目刺食べたしと退院第一夜 徳島 岩田公次

無事退院を果たした家族の会話が聞こえてくるよう。ほろ苦く歯心えのある目刺は、病院食にはほど遠く、独特の風味は日常の味でもある。ふだんの生活に戻ってきた安堵感を目刺が伝える。平明にして味わい深い句である。（眞理子）

筆者の経験からすると、入院中の病院食は、それほど不味いとは感じなかったが、やはり栄養のバランスを一番に考えているので、どうしても薄味であったと、今更ながら思い出している。塩の程良く効いた「目刺」で、炊き立ての御飯を頬張る至福は、やはり日本人ならではの御馳走であろう。（廣太郎）

（以下略）

全山を光の海にして新樹 奈良 古賀しづれ

季節が見事に詠まれている句である。「新樹」は初夏の瑞々しい緑に覆われた木々のことであるが、似た季節に「新緑」がある。「新緑」は初夏の木々の緑のことであるのに対し、「新樹」は初夏の樹木や木立の情景、雰囲気であらわしている。

作者は、晴れた日の新樹の山深く入って来て、若葉に覆われた瑞々しい木々の雰囲気感動されたのであろう。また、明るく展けた眺望には低く連なる新樹の山々の光景も見られるのかも知れない。「全山を」と詠み、「光の海にして」と詠んで、詩情濃く「新樹」が称えられている。（葉）

天地有情

くつろぎというて花詠みつづく旅
 夜は星の降るみよし野の花の宿
 ラグビーや風にスクラム組んでをり
 蕎麦好きで阪神ファンでラガーかな
 夏稽古恋ひ虚子を恋ひ若さ恋ふ
 偲びけり短夜の灯を消してより
 佐比売野のホ句の宿りや時鳥
 卒寿てふ花鳥の世界時鳥
 されどなほ花鳥諷詠明易し
 われら虚子信順の徒や明易き
 臙なる由良の水面や溪深し
 牡丹の花の豊かな起伏とは
 極楽は黄塵に満つ世と思ふ
 花にわが九十一の誕生日
 浴衣着てこれはサンバでなき社中
 市歌をもて祭囃子としたるかな
 惜春の人が大吊橋の上
 心地よき立夏の靴でありにけり

相模原 木村享史
 同
 東京 稲畑廣太郎
 同
 同 今井千鶴子
 同
 福山 竹下陶子
 同
 長岡 安原 葉
 同
 榎原 稲岡 長
 同
 徳島 上崎暮潮
 同
 神戸 後藤比奈夫
 同
 熊本 岩岡中正
 同

米寿なほ健啖として爽やかに
 病む妻のかたへに春の眠りふと
 登山地図晴の日の色にて描かれ
 香水の匂のあちらこちら向く
 今年また咲きし確かさ桐の花
 確かなる思ひ出つづき桐の花
 同点の果は引分け夏夜更く
 出来てゆく出来てゆくもの鱈雲
 豆飯といふ一寸したおもてなし
 口ばかり出す一人みて溝浚へ
 着陸へ広がつてゆく麦の秋
 梅雨のある国に生まれて梅雨を待つ
 夕富士の影一湾の卵浪かな
 谷戸ごとの小川卵の花腐しかな
 更衣しても誰にも気づかれず
 嫁ヶ島時に沈めて卵浪かな
 桐の花ほとほと落つる信濃の夜
 ほととぎすの声に呼ばれて訪ふ三瓶

仙台 赤川誓城
 同
 神戸 後藤立夫
 同
 熱海 嶋田一步
 同
 大阪 蔦 三郎
 同
 神戸 三村純也
 同
 箕面 井上浩一郎
 同
 東京 河野美奇
 同
 同 内藤呈念
 同
 神戸 長山あや
 同

心子選

天地有情句評

汀子

季題の宝庫三瓶山の時鳥。

われら虚子信順の徒や明易き 長岡 安原 葉

虚子の許で学んだ日々を恋う。

夜は星の降るみよし野の花の宿 相模原 木村享史

臃なる由良の水面や溪深し 榎原 稲岡 長

桜ばかりではない吉野山の魅力。

今日は臃の由良川の流れ。

ラグビー風にスクラム組んでをり 東京 稲畑廣太郎

花にわが九十一の誕生日 徳島 上崎暮潮

ラグビーの逞しさの魅力。

長寿に驚く作者。

夏稽古恋ひ虚子を恋ひ若さ恋ふ 東京 今井千鶴子

浴衣着てこれはサンバでなき社中 神戸 後藤比奈夫

彼の日々が忘れられない作者の青春。

くつろぐ浴衣姿に心踊る。

佐比売野のホ句の宿りや時鳥 福山 竹下陶子

(以下略)